# こごみ日和

京都発!ごみ減量情報誌





新たな流れが、起きつつあります。 希望は、「人」です。

酒井 伸一

京都高度技術研究所副所長·京都大学名誉教授 1955年兵庫県生まれ。専門は環境工学。研究テーマは化学物質、 循環型社会など。研究の傍ら国や自治体の審議委員を歴任し、政策

『こごみ日和』100号を記念しての特別インタビュー第1回は、長年日本の廃棄物管理や循環型社会の研究をリードして来ら れた酒井伸一氏にお話を伺います。「100号記念らしい明るい話でなく、厳しい話になってしまうけれど…」との前置きの うえ、インタビューはスタートしました。

#### ――社会の「静脈 | を研究テーマに選 ばれたのは、何かきっかけがあったの でしょうか。

僕が進路を考えていた高校時代は、 公害が次々と明らかになり、環境問題 がメインストリームへ出かかった時代 でした。ローマクラブの『成長の限界』 が発表された頃です。問題意識を持つ なか、「廃棄物工学」という専攻を京都 大学にみつけて、熱い思いをもって入 学したのが始まりです。

#### ――『成長の限界』の発表は1972年 ですね。それから半世紀です。

絶えず社会問題にぶち当たってきた というのが自分の研究生活です。特に ダイオキシン。人工物質として世界最

強とも言われた毒物が、ごみの焼却か ら出ていることがわかったのです。日 本中のすべての焼却炉が止まるかもし れないという大騒動でした。

#### ――ご著書『ゴミと化学物質』の冒頭 に「現代社会への非常事態宣言である | と書かれています。

ダイオキシンはじめ、顕在化した化 学物質汚染については、その都度なん とか抑えて、コントロールしてきまし た。ですが、本質的な構造は変わって いない。社会の維持が危ぶまれるよう な問題が、常に出てきます。

#### ――京都のごみ政策にも審議会を通し て長く関わってこられました。情報誌 『こごみ日和』も発刊から27年です。 この間の京都のごみの変化をどう見て おられますか。

京都はよくやってこられたと思いま す。いち早く「ごみ半減」を目標に掲げ、 2019年に見事に達成しました。京都市 民が誇っていいことだと思います。 2021年にはレジ袋、ペットボトル、食 品口スなどをピックアップして、より細 かな、独自の目標\*1を立てています。

ただ、道はまだ険しい。京都に限っ たことではありません。自分にも返っ てくる話ですが、半減のその先をどう 描き、どう循環型社会を実現していけ るのか。私たちは問われています。

※1: 「京・資源めぐるプラン」より抜粋

	2019年度 実績(年間)	2030年度 目標(年間)
レジ袋使用量 (家庭)	2500トン	400トン
市民1人 当たり	220枚	35枚
ペットボトル 排出量 (家庭)	3400トン	1600トン
市民1人 当たり	90本	45本
<b>食品ロス</b> 排出量 (家庭・事業)	6.1万トン	4.6万トン

#### ── 「ゼロウェイスト」のキーワード が注目されています。

個人的にはゼロを目標にするのは苦 しいと捉えています。コロナ禍に改め て実感させられましたが、「エッセン シャルなごみ」というものが存在しま す。感染の可能性のあるごみをはじめ、 循環型社会を目指すなかでも、ごみを ごみとして適正に処理、つまり焼却す べきものがあります。災害時に出る大 量のごみを速やかに処理するための備 えも欠かせません。

その一方で、戦後から続いてきた焼 却一辺倒では立ち行かない。私たちの 大きな目標として、2050年脱炭素が あります。

#### ――廃棄物分野から排出されるCO2 はどのくらいでしょうか。

国の総排出量の約3%です。その8 割は焼却によるもの。また、その約半 分がプラスチックの燃焼から排出され ています。脱炭素とプラスチック削減 は密接不可分です。再生可能な素材へ の転換も含めて。

#### ――環境省の審議会では部会長を担わ れています。どんな議論がされている のでしょう。

プラスチック対策は重点課題として 進めています。2020年にレジ袋が有 料化。2022年にプラスチック資源循 環促進法がスタートし、プラスチック 対策への事業者の関与は強くなりまし た。市民感覚ではどうですか?変化は 感じられますか?

#### あらゆるものがプラスチックに包まれ ており、まだまだ使い放題という印象 です。

だとしたら、声をあげてほしい。削 減対象の12品目\*\*<sup>2</sup>に続き、ペットボ トルだとか、文具など、環境配慮設計 対象の製品について、次々と指定を進 めてほしいと期待しています。とはい え、思うように動いていないのも事実。 **すか?** 審議会でも悩み、苦しみながら議論を 重ねているのですが、市民の声も重要 です。率直な意見が寄せられることで、 審議にも緊張が走るものですし、何よ り社会を動かす投票権をもっているの は市民です。

現在は、循環型社会実現のための基 本計画を見直す議論を進めています。 大きな課題は、脱炭素との整合性。廃棄 物分野から排出されるCO。は国の総排 出量の3%と申し上げましたが、それは あくまで出口である焼却を中心とする 部分。資源循環を徹底させることで、 36%ものCO。削減に貢献するポテン シャルがある。そんな試算<sup>\*3</sup>があります。

#### ---36%、とても大きな数字です。 サーキュラーエコノミー (循環経済) への移行は、それだけのインパクトが あるのですね。

世界は循環経済へ急激に舵を切って います。日本は2000年の循環基本法\*4 のもと、循環型社会を目指してきたので すが、循環経済構築は、まだまだ形に なっていません。

#### ――京都でできることは、例えばどん なことがありますか。

もっとも手をつけやすいのは、食品 ロスと生ごみではないでしょうか。現 在南部クリーンセンターに生ごみのバ イオガス化施設があります。一基のみ で、生ごみの分別回収ができていない ため効率が良くない。やり方を変えて、 全戸から回収しバイオガス化が実現で きれば、生ごみは燃やすごみの40%で すから、ごみ量は相当減ります。さら に燃やすごみの水分が減るため、焼却 からより多くのエネルギーを得ること

**――変化はまだ大きくないと思います**。 ができる。生ごみから得られるバイオ ガスをクリーンなガスとして、副産物 を化学肥料の代替として、流通させる 道もあります。何より生ごみが少なく なったその他のごみを「資源」として 視ることが容易になります。

### ――循環型社会を実現するために、私 たち一人ひとりにできることはありま

市民の力は大きいです。率直な意見 を表明することも、3Rマインドをもっ て「買う」という投票権をしっかり使 うことも、大きな力になります。誰か が変えてくれるのを待っていては、循 環型社会は成し得ません。皆がプレイ ヤーにならないと、できないと思って

僕は本当に贅沢な時期に生きさせて もらったと、次の世代に申し訳ない気 持ちでいます。これまで挫折にも近い 気持ちも多く味わってきたけれども、 行政にも、事業者にも、そして市民に も、新たな流れを模索する人たちがい ます。僕にとっては、それが光明です。 状況は厳しいものの、そこに大きな希 望を持っています。

- ※2:プラスチック資源循環促進法に定められる特 定プラスチック使用製品として、削減対象と した品目。使い捨てのスプーン、ストロー、ヘ アブラシ、ハンガーなど12品目を指定。
- ※3:「第四次循環型社会形成推進基本計画」第2 回点検及び循環経済工程表
- https://www.env.go.jp/page\_00186.html ※4:循環型社会形成推進基本法
- https://www.env.go.jp/recycle/circul/ recycle.html



聞き手:佐藤文絵(2024年5月7日)



# 編集後記

## ~こごみ日和100号記念に寄せて



High Moon

海ごみ・観光ごみ・食品ロス・過剰包装等ごみを取 り巻く状況は厳しいものがありますが常に挑戦す る姿勢で、多くの皆さんと一緒に行動することを念 頭に置いて「こごみ日和」頑張っていきたいと思い ます。

京都市ごみ減量推進会議会長中田富士男

こごみ日和の制作メンバーとして約10年間お世話 になりました。この間、取材先の多くの方から"ご み減らし"に関する努力や楽しさを伺うことができ ました。私自身、この取材を通じて、もったいない 精神のある京都市民であることが誇らしく思える ようになりました。

> 京都市ごみ減量推進会議 普及啓発部会長 高野 拓樹 京都光華女子大学・教授

私が住む京町家は、通り庭を風が抜け夏を涼しく過 ごす工夫や、別の家でもっぺん使える建具の規格な ど"未来を見据えた"知恵が込められています。こ ごみ日和が発信する取り組みも "未来を見据えた" 今日(京)のこと。今日から未来へ、つなげていき ましょう!

> 情報誌ワーキングチーム 幹事 宮原佑貴子 京都光華女子大学・講師

『こごみ日和』の前身である『ごみを減らそう!! 第1号』(1997年3月創刊)から、編集に関わって います。協働って?パートナーシップって?循環型 社会って?何もわからない中で、より良い誌面を求 め、時に迷子になり、手探りで歩んできた27年。 多くを学ばせてくれました。

> ふろしき研究会代表理事 コピーライター 森田知都子

こごみ日和紙面にて初めてインタビューして頂き、 コラムを担当して10年。SDGsが誕生し、環境問 題はより身近なものになりました。昨年末の出産を 経て新たな気づきもうまれています。1つ1つの気 づきに大切に向き合い、美しい京都を守っていきた いです。

> 海平 和 KBS京都アナウンサー

取材を通し、しばしば大きな視点をもらいます。 100号記念・酒井先生インタビューから「物資フ ロー」を知りました(『環境白書』ご参照のほど!)。 すごく面白く、頭がすっきり。視界がクリアになっ た気分です。80億人の「始末のいい暮らし」があ り得るのか、Think globally, act locallyで考えつ づけたいです。

ライター 佐藤 文絵

もともと環境問題に関心があり、ごみ拾いなどして きましたが、こごみ日和に関わり、ごみの分別に ついて学び直しました。4月からコミュニティFM 「ラジオミックス京都」のパーソナリティになり、 番組内でも、ごみの分別について楽しくお伝えして います。命の源「地球」に意識を向けたいです。

編集ライター 藤嶋ひじり

設立から28年。113団体でスタートした会員数は、 現在では530団体に。こごみ日和で取材した団体は のべ200団体以上、地域ごみ減量推進会議への取材 はのべ100団体にも上ります。 これからも、「こご み日和」に取材してもらって良かった!という声を 頂けるよう、皆さまの活動をしっかりと応援してい きます。

京都市ごみ減量推進会議事務局





